

テナガエビ資源と漁場環境について

霞ヶ浦北浦におけるテナガエビの漁獲量は、昭和 50 年の 4,972 トンをピークに徐々に減少して、平成9年では 1,636 トンと約 1/3 までに落ち込んでいます。しかし、テナガエビは霞ヶ浦北浦の漁獲量の約4割を占め、魚種別漁獲量でも第1位で、霞ヶ浦北浦の漁業になくてはならない存在です。

そこで、今回は、このテナガエビ資源の変動要因として、特に産卵期である夏季の漁場環境に着目し、今年状況をふまえて説明したいと思います。

テナガエビ資源と夏季の漁場環境について

【溶存酸素量との関係】

近年の霞ヶ浦では、夏季に底層で無酸素状態が発生し、底層に生息するテナガエビやハゼ類にとって問題となっています。今年の霞ヶ浦の底層における溶存酸素量の状況として、内水面水産試験場棧橋での測定結果を図1に示しました。この図から、今年は例年のような酸素量の著しい低下が幸いなことに見られず、親エビにとって良好に推移したものと思われます。

【水温との関係】

テナガエビの場合、産卵期である夏季の水温が高いほど、産卵条件が良くなることが知られています。ご存知のように、今年の夏は猛暑で、霞ヶ浦の水温も 30℃を超える日が数日もありました。表1に過去5年間の試験場棧橋での水温の測定結果を7～9月の平均値で示しましたが、この表からも今夏の水温が例年になく高かったことがうかがえます。

また、この7、8、9月の平均水温の合計値が高いほど、秋季における稚エビ資源密度が高まるという報告もあり、今夏の高水温が稚エビの発生にプラスに作用したことが考えられます。

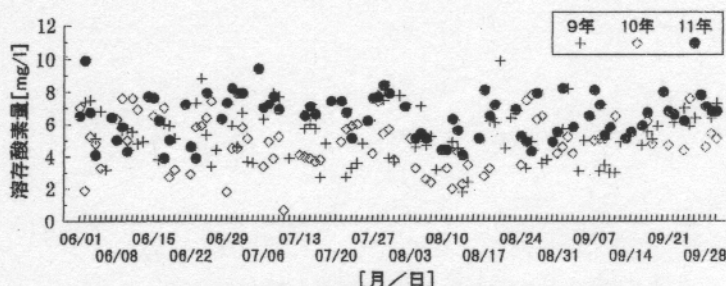


図1 内水面水産試験場棧橋での溶存酸素量(底層)の推移

表1 霞ヶ浦の月別平均水温

単位:℃

	7月	8月	9月	合計
7年	25.5	30.1	24.2	79.8
8年	25.4	27.2	23.0	75.6
9年	27.4	27.8	24.6	79.2
10年	25.5	27.2	25.0	77.7
11年	25.7	29.5	26.7	81.9

(内水面水産試験場棧橋測定データ)

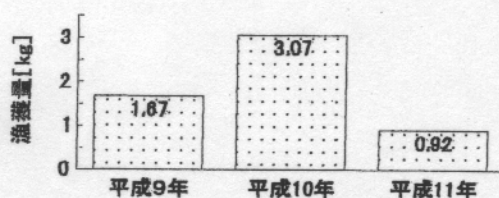
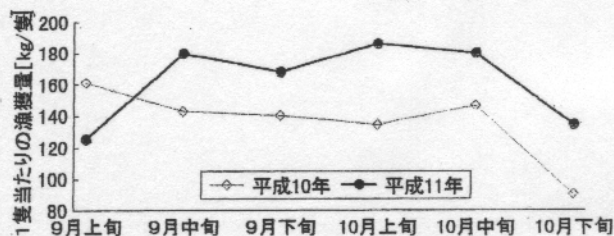
今年の漁獲状況について

【張網での親エビの漁獲状況】

例年、霞ヶ浦では産卵期及びその前に親エビを湖岸に設置した張網やいさざ・ごろひき網漁業で漁獲します。今年の親エビの漁獲状況として、張網(美浦村木原地先)での5～7月における平均漁獲量(1日1ヶ統当たり)を図2に示しました。この図から、今年の親エビの漁獲量は平成9、10年と比べ少なかったことがわかります。

【秋季のザザエビ(小型のテナガエビ)の漁獲状況】

今年生まれのテナガエビ(ザザエビ)については、9月以降、主にわかさぎ・しらうおひき網漁業(トロール)で漁獲されます。霞ヶ浦における今年及び昨年のザザエビのトロールでの漁獲状況を1隻当たりの漁獲量で図3に示しました。この図から、今年のザザエビは昨年より多いことがわかります。

図2 張網でのテナガエビ平均漁獲量
(美浦村木原、5～7月)図3 霞ヶ浦におけるトロールでのザザエビの漁獲状況
(霞ヶ浦北浦水産事務所調べ)

以上のことから、今年は親エビの量に対しての稚エビの発生量が昨年より多く、その原因として夏季の底層での溶存酸素量の著しい低下がなかったこと、及び高水温であったことが考えられます。

資源管理型漁業の取り組み

すでにワカサギ稚魚の保護を目的としたいさざ・ごろひき網漁業の自主休漁の取り組みが霞ヶ浦漁連、北浦漁連、霞ヶ浦北浦加工連が中心となって実施されています。

さらに、今年は大量に発生した稚エビ資源の保護を目的に霞ヶ浦漁連が主体となり、いさざ・ごろひき網漁業の自主休漁、及びわかさぎ・しらうおひき網漁業の底層ひきの操業自粛が8月21日から8月31日まで実施され貴重な資源を有効に利用するための努力が行われています。